

7. 特発性血小板減少性紫斑病に対する脾摘後に生じた脾嚢胞症の1例

高木一也, 織田良雄 (千大)

仮性脾の嚢胞は、主に脾炎や外傷に続発する比較稀な疾患であり、腹部手術後の脾合併症の頻度もそれ程高いものではない。また術後という状態によって様々な修飾を受けるため、診断も遅れがちとなる。今回我々は、I.T.P. に対する脾摘術後の仮性脾の嚢胞を経験したので、その成因について若干の文献的考察を加えて報告した。

8. 外傷性横隔膜ヘルニアの1例

宮内 充, 塚本哲也 (千大)

28歳男性。ラグビー練習中、蹴られて左肋骨骨折。一年後、イレウス症状発現し、近医にて緊急開腹。手術診断は、横行結腸の横隔膜ヘルニア嵌頓。回腸-S状結腸吻合術のみを行なった。半年後、当教室にて根治術を施行した。回腸-S状結腸吻合部解除の目的もあったが経腹的に侵入。嵌入した横行結腸、大網を用手還納後、径3.5cmの横隔膜裂傷部は絹糸結紮縫合で閉じた。術後十分に肺を加圧し、胸腔ドレーン等の胸腔操作は、一切行なわなかった。

9. 外傷性横隔膜破裂

真田正雄, 野口照義 (千葉県救急医療)

昭和55年4月より昭和58年10月まで当センターで経験した外傷性横隔膜破裂は、全外傷の約1.2%であり、急性型13例、遅発型1例の計14例であった。鈍的破裂9例中3例が左側、6例が右側、鋭的損傷5例中4例が左側、1例が右側例であった。遅発型の1例は受傷後10年目に回腸が右横隔膜に嵌入穿孔して発症した症例であった。本疾患の診断の要点は、胸腹部外傷全ての患者に本損傷を考え、胸部写真を観察することが最も重要である。

10. 成人における総肺静脈還流異常の1治験例

筑摩明彦, 山本和夫 (千大)

成人の総肺静脈還流異常症は、極めて稀である。我々は、その一治験例を経験したのでここに報告する。44歳女性、入院時 NYHA 2°, 胸部 X-p にて、雪ダルマ型陰影を呈し、心カテーテルにて、肺高血圧は、認められなかった。手術は、左房後壁と、固有肺静脈を連続縫合し心房中隔欠損は、パッチにて閉鎖。垂直静脈は、2重

に結紮した。成人まで生存しえたのは、肺高血圧がなく、十分な大きさの心房中隔欠損によるものと、思われる。

11. 嚥下障害を主訴とした胸部大動脈瘤の1治験例

白井芳則, 古川 斉 (千大)

患者は68歳の女性、嚥下困難を主訴に来院。胸部X線で上縦隔の拡大があり、食道造影では中部食道が後方から強く圧排されていた。食道穿孔の危険も考えられ可急的速やかに手術を施行した。手術所見は左鎖骨下動脈分岐部の10cm 下方から始まり模隔膜直上に至る大動脈瘤が認められた。大腿動静脈部分体外循環下に大動脈瘤を切除。再建には径22mm の Woven dacron graft を用いて人工血管移植術を行なった。術後愁訴は著明に改善された。

12. 胸腹部大動脈瘤の1治験例

藤澤秀樹, 椎原秀茂 (千大)

嘔気、腹部膨満感を主訴とし、中等度腎障害を有する64歳男性に生じた、腹腔動脈、上腸間膜動脈、左右腎動脈を含む、胸腹部大動脈瘤に対して手術法を工夫し、一時バイパス作製と腎動脈再建を先行させ、更に、腎保護のため冷却ラクテック灌流と局所冷却も併用して、術後腎機能低下に対処した一例を経験したのでここに報告する。

13. Marfan 症候群に合併した大動脈弁閉鎖不全症の1治験例

阿部弘幸, 北川学代 (千大)

Marfan 症候群は心血管病変として Annulo-Aortic Ectasia の病態を合併することが多く、その AAE に対する外科治療は、1968年以降 Bantall 手術の出現により比較的安定した成績が得られるようになった。先天性の結合組織疾患である Marfan 症候群は、組織が脆弱なため、手術施行後の晩期合併症の発生や、上行大動脈以外の領域への病変進展の可能性もあり、長期に於ける経過観察が必要と思われた。

14. Lutembacher 症候群の1治験例

中谷 充, 山本和夫 (千大)

Lutembacher 症候群の一治験例を経験したので報告する。本症候群の診断は、心臓カテーテル検査では僧帽弁狭窄による左房圧上昇は心房中隔欠損により軽減さ